第３部　分野別の基本方針

Ⅰ　都　市　構　造
Ⅱ　土　地　利　用
Ⅲ　交　通　体　系
Ⅳ　都　市　環　境
Ⅴ　都　市　防　災

1 都市構造

まちづくりの基本的方向

1　魅力ある「地域生活拠点」としての登戸・向ヶ丘遊園駅周辺地区の育成・整備

2　駅を核とする身近な生活圏を単位にしたまちづくり

3　地域資源を活かした、住み続けられるまちづくり

4　水・緑の保全と回復による豊かな住環境づくり

5　人と環境に優しい交通ネットワークシステムの形成

＜現状・課題＞

①土地利用

・多摩区の拠点である登戸・向ヶ丘遊園駅周辺地区では、昭和 63(1988)年３月に土地区画整理事業が都市計画決定され、現在、事業が進められていますが、平成 17(2005)年３月現在、仮換地指定面積率は、43%となっており、事業の推進が望まれています。

・区内の大半の地域は、鉄道駅から１㎞圏内に含まれていて、駅を中心に生活圏が形成されていますが、各駅の駅施設の改善や駅周辺地区の交通アクセスや歩行者空間の改善が課題となっています。

・丘陵地の住宅地は、土地区画整理事業等により計画的な市街地開発が行われてきましたが、少子高齢化の進展に伴いコミュニティの活力の低下が懸念されるとともに、坂道が多い丘陵地特有の地形から、交通手段の確保等が課題となっています。

・平たん地の住宅地は、生活道路等の基盤が未整備なまま農地が宅地化していることから、農地の保全とこれらに調和した住環境の改善が課題となっています。

・多摩区は、持家率が低く、民営借家が多く、単身世帯の住居が多い特徴があります。子育て世代層の流出傾向があり、ファミリー向けの住宅供給が課題です。

・多摩区では、昭和 30 年代後半から昭和 40 年代に急速に宅地化が進んだことから、道路等の都市基盤施設の整備が追いつかず、市民生活に欠かせない道路や公園等の骨格的な都市基盤整備が求められています。

②自然環境

・多摩区は、多摩川沿いの平たん地と多摩丘陵上の丘陵部から構成され、区の中央部には、生田緑地を含む多摩丘陵の多摩川崖線の斜面緑地が連なっています。区内には、多くの山林や農地が残されていますが、急速な宅地開発により面積が減少しており、これら自然環境を保全していくことが課題となっています。

・区内を流れる河川として、多摩川水系の五反田川と三沢川があります。治水対策を進めるとともに、水辺に親しめる環境づくりが課題です。さらに、大丸用水や二ヶ領用水の水路網が広がっており、水辺環境の再生が求められています。

③交通ネットワーク

・区内の都市計画道路の整備率は、平成 17(2005)年４月現在、約 47%で、全市平均約 61%に比べて、低率にとどまっています。鉄道については、区内を縦横に、ＪＲ南武線と小田急小田原線、京王相模原線が走っており、鉄道の利便性が高い地域ですが、その一方、鉄道による地域の分断や踏切等に起因した渋滞が課題となっています。

1　魅力ある地域生活拠点としての登戸・向ヶ丘遊園駅周辺地区の育成・整備

（1）地域生活拠点としての「登戸・向ヶ丘遊園駅周辺地区」のまちづくり

・登戸・向ヶ丘遊園駅周辺地区は、ＪＲ南武線と小田急小田原線の交差する交通結節点として、古くから商業と生活の拠点となっていることから、その交通利便性と地域特性を活かして、本市の「地域生活拠点」として土地区画整理事業を推進します。
・多摩区の商業・業務の中心として、多摩区総合庁舎などの行政施設、市立多摩病院などの医療施設が立地し、周辺には、大学などの教育施設、日本民家園・岡本太郎美術館などの文化施設などが集積しており、生田緑地や多摩川とのつながり、歴史資源など地域固有の資源を活かして、「地域生活拠点」にふさわしい新しい都市機能の導入をめざします。
・土地区画整理事業による街区の再編の機会をとらえ、住民の発意による主体的なまちづくり活動を支援し、魅力ある街なみ景観の形成をめざします。
・周辺部の住宅地は、少子高齢社会における、良好な住環境を備えた街なか居住を進める地区として、多様な世代が住み続けられるまちをめざします。

2　駅を核とする身近な生活圏を単位にしたまちづくり

・区内には、登戸駅･向ヶ丘遊園駅を始め、ＪＲ南武線の稲田堤駅、中野島駅、宿河原駅、高津区に位置する久地駅、小田急線の生田駅、読売ランド前駅があります。これら鉄道駅を核にして、区内の大半の地域が駅から１㎞ の徒歩･自転車圏に含まれています。また、長沢地区は、バス路線網が整備されているとともに、川崎縦貫高速鉄道線の鉄道駅の整備も予定されており、自立的な生活圏を構成しています。引き続き、鉄道駅を核とする生活圏を単位にしたまちをめざします。
・各鉄道駅を中心とした地域は、それぞれ、地形的特質や地域の歴史、市街地開発の経緯を背景として、個性のある生活圏が形成されています。この６つの鉄道駅周辺地区と長沢地区を、地区コミュニティの「生活拠点」と位置づけ、それぞれの特色を活かした魅力の創出をめざすとともに、生活者の視点に立って、安全・安心なまち、歩いて暮らせるまちを育みます。

3　地域資源を活かした、住み続けられるまちづくり

（1）「農」のあるまちづくり

・市街地における「農地」は、水路や山林、屋敷林などと一体的に「農」のある景観を形づくっています。また、「農業」は、新鮮な農産物を供給する地域の産業として、また、歴史文化を継承する重要な役割を担っています。水・緑・人をつなぐコミュニティを育む「農」のあるまちをめざします。

（2）住環境の質的向上

・住宅地の形成の経緯や居住者の年齢層、環境条件など、それぞれの地域の特性に合わせて、住環境の維持・改善に住民と共に取り組みます。
・地域の住環境全体の長期的な質的向上をめざして、地区計画や建築協定等を活用した土地利用や街なみ景観のルールづくりをめざす住民の発意による主体的なまちづくり活動を支援します。
・住宅の更新や住民の住み替えなどを支援するとともに、生活道路等の基盤の改善に努め、多様な世代が住み続けることができる住宅地のまちづくりをめざします。

4　水・緑の保全と回復による豊かな住環境づくり

（1）水・緑・農のあるまちづくり

・水・緑・農は、長い年月をかけて多摩区に受け継がれてきた貴重な環境資源であり、これらを活かし、豊かな自然環境と魅力的な都市空間・居住環境とのバランスが取れた「水・緑・農のあるまちづくり」をめざします。

（2）多摩丘陵の緑の保全

・豊かな自然を残す多摩丘陵の斜面緑地、特に、生田緑地から小沢城址特別緑地保全地区周辺にかけて位置する多摩川の崖線の斜面緑地は、貴重な自然環境であることから、「（仮称）多摩川崖線軸」として、重点的に保全すべき緑と位置づけ、その保全に努めます。
・生田緑地は、首都圏の貴重な緑の核として緑地の保全・活用を図るとともに、多摩川や二ヶ領用水とのつながりや周辺の拠点地区や住宅地、農地を含めた地域のまちづくりを進める都市再生の核として、生田緑地整備基本計画に基づいて整備を進めます。

（3）水に親しめる環境づくり

・多摩川は、「（仮称）多摩川軸」として、治水対策による安全な川づくりを促進するとともに、市街地からのアクセスの改善に努め、広大な水辺の自然空間の保全と、市民の憩いの場としての活用をめざします。
・二ヶ領用水の河川・水路は、「河川軸」として、水辺環境の保全と再生に努め、水に親しめるまちを育みます。

5　人と環境に優しい交通ネットワークシステムの形成

（1）人と環境に優しい交通体系

・自動車への過度の依存を見直し、高齢社会への対応と都市環境への負荷低減の視点から、人と環境に優しい鉄道と道路網の整備をめざします。
・鉄道駅を交通結節点として、バス等の公共交通網や、自転車・徒歩などの交通を主体とした、環境に配慮した交通ネットワークの形成をめざします。また、誰もが安全・快適に利用できる交通施設の環境改善に努めます。

（2）骨格的な交通網と、生活圏における身近な交通手段のバランスを持った整備

・首都圏における広域的な交通幹線網を踏まえて、都市の骨格や市街地の骨格を形成する幹線道路網や、大量輸送を担う鉄道網の強化を図るとともに、未整備の都市計画道路の見直しや効率的な幹線道路の整備に努めます。
・限られた資源を効率的に活用する視点から、長期的な視点に立って骨格的な交通基盤整備を進めるとともに、ボトルネックとなっている交差点の改良や踏切の改善、鉄道駅施設の改良を促進します。
・生活拠点となる鉄道駅を中心にした道路や交通施設の改善や身近な生活圏における生活道路の改善などに努めます。